

紹介

守山記生著

『北フランス・ベルギー』

中世都市研究』

本書は北フランスおよびベルギー中世都市史に関して、著者守山記生氏の諸論文を一冊にまとめたものである。

本書は二部構成になっており、第一部は全体がほぼ北フランスの成立期（一一七〇年—一一八〇年）コミュニティ都市の分析に当てられている。第一章第一節ではコミュニティ運動の原因・運動の担い手の構成・目的・既存権力（司教・国王・諸侯）との関係の概要を述べ、第二節で個別都市の成立状況を検討する。ここで扱われているのはル・マン、カンブレール、サン・カンタン、ボーヴェ、ノアイヨン、ラン、アミアン、ヴァランシエヌスの八都市であるが、最後に全体のまとめとしてコミュニティにおける市民のイニシアチブ、誓約団体の結成・発展を確認している。第三節では、既存権力との関係について、教会、世俗領主、国王

のそれぞれについて考察を深めている。まず教会に関してであるが、成立当初はコミュニティ運動に対して友好的であったこと、その理由としてコミュニティ運動に対する「神の平和」運動の間接的な影響があったことなどを挙げている。そして一二世紀以降、コミュニティ市民側の、誓約団体としてのイニシアチブの高揚に伴い、教会との協約が否認されて行くという経過が示されている。続いて世俗領主に関しては、やはり都市コミュニティに対して友好的であったが、そこには都市コミュニティを都市内秩序の維持組織として利用するという目的があった。しかし成立期以降には自治度が後退していることは確認されている。続いて国王との関係については、都市コミュニティ成立期に当たるルイ六世・ルイ七世の時代と、続くフィリップ・オーギュストの時代に分けて考察している。成立期にはコミュニティに対する国王側の政策には一貫性はなく、概して教会側を支持することが多かったのに対して、一一五六年ごろからは政策が変化し、ルイ七世時代には多くのコミュニティが国王によって認められている。続くフィリップ・オーギュスト治下では王国の制度とし

てのコミュニティが発展して行くことになる。守山氏はこの時期を都市コミュニティ運動の発展期として理解すべきであると述べている。いづれにせよ第一章では、成立期の都市コミュニティ運動は誓約による平和団体運動を一つの基調としたことが主張されている。

第二章は封建制度下の封臣的特色をもつフランス中世都市について、国王に対する（軍役義務を主張するCh・プティ・デュタイイや、平和団体としての性格を重視しその軍事力は住民自らを守る住民軍的なものとするA・フェルメースらの主張を紹介しながら、一一世紀から一四世紀のコミュニティの軍事的特質について検討している。対象としている都市はル・マンとカンブレールであるが、これらの都市は平和を志向する誓約団体としての防衛的軍事組織であり、カペー王権はその性格を利用しコミュニティを戦略上の要塞とする一方、封臣としての軍役に代えて租税代替政策をとり、王権支配拡大に利用したと主張する。尚、第一部末には補遺として、「神の平和」運動の展開についてのランス教会地方・アミアン・コルビー間の動向を主とした分析による論稿と、ノジャンのギベールの回想録第三卷

から、ランのコミュニケーション運動に関する部分をJ・ペントンの英語版から抄訳した史料紹介とが収められている。

続いて第二部ではベルギーの中世都市に入るが、第一章では、主にA・フルヒュルストの業績によりながら、フランドルの発掘調査の結果から中世都市の起源と発展を論じている。ここでは古代からの連続性をもつ前都市の核が中心地機能を果たし、後の都市発展に一定の意義を持ったことが示されている。

第二章・第三章は一転して政治史が扱われており、どちらもフランドル伯シャルルの書記官であったガルベール・ド・ブリュージュの記述になる同時代史料をもとにしている。第二章ではフランドル伯暗殺をめぐって、支配者とその不自由家士一族であるエランバルド一族との関係を考察している。不自由家士をめぐる問題の重要性は守山氏御自身も指摘しておられるが、本書においてはほぼ政変とその前後の事件史的叙述に尽きているようである。第三章では伯暗殺後の相統争い、フランス国王ルイ六世と貴族たちの動向、市民階級の勢力高揚などに焦点を合わせ、一二世紀初期のフラン

ドルにおける政治的変動について考察しているが、特に政変に関与した大貴族の動向と市民階級の重要性を指摘している。政変後、即位した伯は諸都市の好意を得るため特許状を与えているが、サン・トメールの特許状について本文中に多くの条項が紹介され、市民階級の勢力高揚を指摘している。最後に感想を一言述べてさせて頂きたい。本章は同時代史料の抄訳も合わせて収録され、北フランス・ベルギーのコミュニケーション史概観としてよくまとまった一冊であろう。

しかしながら、初出以来長い時間の経過した論文も収録されているため、論文集としての出版に際しては現在の研究動向についても付け加えて言及していただきたかった。さらに、北フランス・ベルギーという一定の領域を扱うに際して、氏は個別都市をコミュニケーションの全体的特徴を得るための素材・データとして検討しておられるが、挙げられている内容の中には、コミュニケーションの一般化に利用するだけでなく、カンブレーのコミュニケーション闘争の北フランス一帯に対する影響や、都市間での情報交換、カペー王権との関連、ブランシボーテとの関連など、諸都市及び諸権力の結びつき・相互関

連から領域全体の把握を可能にする要素も含まれているように思われる。今後の研究成果に期待したいが、その際には個別都市の検討法の整理や、教会・国王・世俗領主といった既存権力間の相互関係の一層の明確化などが望まれるのではないだろうか。

(A5判 三八五頁 一九九五年十一月
近代文藝社 二九〇〇円)

(佐藤公美 京都大学大学院生)

樺山紘一著

『西洋中世像の革新』

本書は、過去東京大学において城戸毅教授に学恩を負った、一七名の中世史研究者の共同論集である。同教授の還暦記念の意図もそこに込められている。『西洋中世像の革新』と題された本書の狙いは、冒頭で編者の樺山氏によって説明されている。まず、かつて中世史研究者が立ち向かってきた「暗黒の中世」像をめぐる近代国家の中世起源説や一二世紀ルネサンス論など中世と近代をめぐる論点から、社会史として歴史人類学などへの視点の移動が概観され、歴史的ダイナミズムを捉えうる視点が今な